

偉人の母 こし三秋にあり

(文責) 吉田 克浩



鷲野南祁の頌徳碑



いた伝承が残り、また「伊豫大洲領御替地古今集」によれば、その五代目が得能六郎左衛門だという記述がある。更

「鷲野南祁(わしのなんそん)」と聞いてピンとくる方はどれほどおられるだろう。郷土史に詳しい方なら、江戸末期に功績を残した漢学者・教員者ではないか、という事はご存知かも知れない。南祁は1805年南黒田村の庄屋梅三郎の長男として誕生し、幼少から秀才の誉れ高く、郡中の教育者陶惟貞(すえい)と親交を結び、大阪で私塾頭まで上り詰めたのち帰郷。親の庄屋職を継ぐ傍ら、私塾「橙黄園」を開塾して多くの子弟を教育した人物である。従って、南祁自身は南黒田村の名士という事になるが、その母親がこし三秋の出身との記録が存在する。

文献によると、「母は三秋村庄屋得能良左衛門知通の娘タメ」とある。現在「得能」姓は三秋には存在せず、西願寺住職にお伺いしたところ、過去に「得能六郎左衛門」という人物が存在することがわかった。三秋ではこの人物が唯一の得能姓であり、前述の良左衛門知通と同一人物でタメの父親と推測できる。

現在、西願寺の近くで空き家となっている下三秋の越智家が昔「小庄屋」と呼ばれていた。三秋地区には、直径1mを超える三本のクスノキの大木が、どしりと根をおろしています。二本は、水之明神社内の社叢(しゃそう)内。もう一本は、下三秋の芝地蔵堂の横です。

悠々と生きる 三本のクスノキ

(文責) 日山 貞治

三秋地区には、直径1mを超える三本のクスノキの大木が、どしりと根をおろしています。二本は、水之明神社内の社叢(しゃそう)内。もう一本は、下三秋の芝地蔵堂の横です。

クスノキは、年中学を付けている常緑の広葉樹で、高さが20〜40mにもなる高木です。成長が早く大木になり、社寺境内で天然記念物として指定されているものも各所で見られます。

樹形は、球形に近く、ボリウム感があります。新緑は、淡い緑色をして美しく、常緑樹としては明るい感じが、すがすがしさを感じますが、四月下旬〜五月上旬にかけて、古い葉が一斉に落葉するので、その時期の神社境内の掃くは大変なことになります。

クスノキは、芳香植物としても有名で、枝を切ったり、葉を揉んだりすると、樟脳(しょうのう)のにおいがします。また、秋には野鳥の餌となる実がたくさんなる食餌(しょくじ)植物としても知られています。

見分け方としては、葉の表面にある三本の脈(三行脈)が目立ち、真中の主脈と葉の根元近くから左右に一对の太い側脈が出る分岐点に、小さなイボ状の点があり、小さなキの仲間はありません(他のクスノキの仲間があります)。



水之明神社の南側のクスノキ



水之明神社の北側のクスノキ



下三秋芝地蔵横のクスノキ

参考資料

国内最大のクスノキ
鹿兒島県始良(あいり)市蒲生(かもう)町
◇蒲生八幡神社の大クス
胸高幹周(きょうこうかんしゅう)24、2

愛媛県内有数のクスノキ

今治市大三島町大山祇神社
◇小千命(おちのみこと)御手植えのクスノキ
胸高幹周11、1m
◇生樹(いきき)の門
胸高幹周15、5

伊予市内有数のクスノキ

伊予市上三谷広田神社
◇広田神社の御神木
胸高幹周5、7m
伊予市下三谷笠中神社
◇笠中(のなか)神社の御神木
胸高幹周4、9m

三秋地区のクスノキ

◇水之明神社の南側のクスノキ
胸高幹周5、6m
◇水之明神社の北側のクスノキ
胸高幹周3、7m
◇下三秋芝地蔵横のクスノキ
胸高幹周3、7m

こう比較すると、三秋のクスノキは、人で例えるならまだまだ若者に該当するかもしれませぬ。

参考文献

『木と語る
えひめの巨樹 名木』
明神山古道のプロジェクトについて
(文責) 玉井 敬信



枯れ木等の徐伐作業



林道整備後



林道整備前

警戒期間の解除に伴い、愛大の建設業者夢一土木さんの力を得て、3年間の事業の初年度を無事終了することができました。現在、林道入口の倒木・土砂等の撤去、5m間の林道の拡張整備、タリゲット森林内での除伐と、刈り払いを行いながらの古道の探査作業を実施する予定としています。

みあき今昔物語 18年前の愛護班活動

(文責) 日山 貞治



①平成14年5月11日



②平成14年6月23日

卒業・入学おめでとう

(文責) 稲多 早苗



中学校卒業の仲良し5人組



小学校入学の4人の新入生



小学校卒業の播磨柚姫さん



小学校卒業の河野彩和さん

花が咲きますようにと願っています。

「三秋ブランド」に 向けてステツプアップ

(文責) 原田 浩明

ツバメたちが巣作りに勤しむ春の陽気の中、4月16日、レンコンファーム三秋において、種レンコンの植付けが行われました。今年も新型コロナウイルス対策として、イベントとしては行わず、会場管理者の吉岡満さんと助っとの原田賀充さんとで、代かきされた泥の中に一本一本丁寧に種レンコンを植える作業を行いました。



種レンコンの植え付け作業

昨年は、連作障害の影響が想定より収量が少なかったため、今年は場所を移動し、面積も1.3倍に増やしました。今は、変異ウイルスの流行も重なり、イベントを行う環境がますます厳しい状況ではあるが、今後ワクチン接種が進んでいくことで、秋の収穫頃までには、状況が改善されると思われます。そして、今年も収穫体験イベントを開催し、三秋の恒例イベントとして定着化出来たならば、このレンコンが「三秋ブランド」の顔へと発展し、三秋の知名度もアップすることでしょう。

三秋の原中の山頂に、頼信城跡と伝えられている場所があります。ここは、前号第12号にてお伝えしました、端集落に点在する五輪塔群に祀られているとされている城主・頼信と二人の弟(姓は伝わっていない)が、暮らしていたという伝説があり、4月10日、

頼信(よりのぶ)城 伝説

(文責) 原田 浩明



頼信城跡とされる場所

その裏付け調査として、伊予市文化財専門員の島崎さんと地域新聞みあき取材スタッフ2名とで行った。現地に行く、と、迂りはシダや雑木林に覆われており、ここが城跡であったとされる明確な証拠は見つけ出せませんでした。が、削り取られた平地だけは確認出来ました。この平地については、過去の調査資料の内容とはほぼ一致するもので、おそらく、この場所が頼信城跡であろうと思われる。周囲の木々やシダ等が無くれば大変見晴らしの良い場所なので、見張り台としての機能は十分に果たしていたと推察されます。

参考文献

山本雅夫 1988 「伊豫市中世城館跡の調査」『伊豫市の歴史文化』18

頼信城跡推定地位置(赤マルのところ)

